



日本老年行動科学会
Japanese Society of Behavioral Sciences for the Elderly

お知らせ No.27

<学会事務局>

〒166-0013 東京都杉並区堀ノ内1-24-1

電話・FAX: 03(5941)5270

<学会ホームページ>

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsbse/>

*****2010年度 年頭のご挨拶*****

**日本老年行動科学会
会長 佐藤 眞一**

2010年、新たな年度が始まりました。会長として一言ご挨拶申し上げます。

まずは、会員の皆様方には、平素より学会活動に関してご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

私が会長職を与って2期目2年目の昨年は、第12回大会を荒木乳根子大会長のもと神奈川県川崎市の田園調布学園大学にて開催致しました。荒木会長をはじめ、大会準備委員の皆様、田園調布学園大学関係者の皆様のご努力のおかげをもちまして、多くの会員や関連の皆様にご参加いただき、充実した大会となりました。そして、本年度9月には、第13回鹿児島大会が開催されます。鹿児島大会は、2002年の第5回大会以来になります。前回の鹿児島大会の充実ぶりと、水上花火で盛り上がった懇親会を思い出される会員の方々も多いのではないのでしょうか。大会長の前田義博鹿児島支部長を先頭に準備は着実に進んでおり、すでにプログラムも練られているとお聞きしています。全国の会員の皆様と、鹿児島で再会できることを楽しみにしています。



本年度の重要な取り組みは、昨年来行ってきたACS改革に目処をつけて、新生ACSを実施することです。今後のACSは、作成したケアプランの実施からモニタリング、評価、ケアプランの再策定までを行うことを目標にしています。現在は、その具体的実施法の検討に入っています。

また、昨年度まで行ってきた老年行動科学講座は、4年間の取り組みでひとまず休止し、今後は、老年行動科学の理論的・方法的確立に向けての研究を促進し、学会誌および書籍によって情報発信を進めてゆきます。

学会誌「高齢者のケアと行動科学」の充実に向けて、多様な論文の掲載は重要な課題です。ACS改革とも連動して、事例研究の論文件数を増大させたいと考えています。

学会総会は、2月21日（日）に開催予定です。本年度は私の任期の最終年度に当たりますので、来年度の新理事会発足を見据えて本年度の活動を進めて参る所存です。会員の皆様には、是非とも総会にご参加下さるようお願い申し上げます。会員広報紙「学会からのお知らせ」とメール配信、学会ホームページで詳細をご確認下さい。

超高齢化時代に向けて新しい国家的な取り組みが次々と始められる模様です。しかし、本学会が標榜する科学的根拠を持ち、かつ人と人との出会いから始まる高齢者の行動とケアについての研究と実践は、その重要性にいささかの変化もありません。自信をもって着実に進歩させてゆきたいと、思いも新たにしております。

最後になりましたが、本年も、会員の皆様方の倍旧のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のご健康とますますのご活躍とご発展を心から祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

総会・総会記念プログラムのご案内

<総会>

日 時：2010年2月21日（日）13:00～14:00
会 場：筑波大学東京キャンパス大塚校舎G館4階 501教室
連絡・報告：①第13回鹿児島大会について
②新しいACSの取組（進捗と今後の展開）について
③学会の新しい方向性について
④理事改選の選挙等について
議 題：①2009年度活動・事業報告と会計報告
②2010年度活動・事業計画と予算

詳細につきましては、
本「お知らせ」に
同封の別紙案内を
ご覧ください。

<総会記念プログラム>

日 時：2010年2月21日（日）14:15～17:00
会 場：総会と同じ
タイトル：「ACS改革経過報告：新方式フォーマット完成に向けて」
（事例タイトル：「お金や家族に対する心配・不安から、不穏・不眠状態に陥ってしまう
利用者へのアプローチの検討」）
★事例検討後には意見交換を予定しております。あなたのご意見をお聞かせください！

2009年12月12日 2009年度第6回常任理事会が開催されました

日時：2009年12月12日（土）11:15～14:45
場所：筑波大学東京キャンパス大塚地区 E館
グループワーク教室（東京都文京区）
出席者：佐藤会長他14名（欠席6名）
議題

1. 報告・確認事項

- ①本部会計報告・事務報告
- ②会員動向（11月末日で会員数715）
- ③各委員会と事業関係報告
- ④支部活動報告
- ⑤第12回大会収支報告
- ⑥新しいACSの取り組み進捗
- ⑦機構改革ワーキング・グループからの経過報告

⑧来年度の主な活動・事業スケジュール

2. 審議・協議事項

- ①本年度の活動総括
- ②本年度の本部会計見通し
- ③来年度の活動・事業計画案確認
- ④来年度の本部予算案確認

3. その他

- ①記録関係資料の内容確認
- ②総会後の会員向けイベント案について
- ③第14回大会の開催地について

2010年1月30日 2010年度第1回常任理事会が開催されました

日時：2010年1月30日（土）18:20～20:00
場所：筑波大学東京キャンパス大塚地区
E館223教室（東京都文京区）
出席者：佐藤会長他12名（欠席8名）
議題

1. 報告・確認事項

- ①入退会会員について
（2009年度末で会員数722）
- ②本部事務報告
- ③委員会活動報告・各担当理事所管
事業報告
- ④新しいACS取組進捗報告
- ⑤機構改革ワーキング・グループの
経過報告
- ⑥各支部の活動

⑦2010年度第13回大会について

⑧その他

2. 審議・協議事項

- ①2009年度の事業・活動報告と会計報告
（決算案）
- ②2010年度の事業・活動計画と予算について
- ③定時総会記念プログラムについて

3. その他

- ①将来的に、投稿論文の書き方について
セミナーを実施することを検討する。
- ②編集幹事を2名増員することとした。

※常任理事会は年に6回開催されます。
次回は4月10日（土）の予定です。

2009年度 日本老年行動科学会 活動報告

2009年度には、下記のような事業を行いました。

1. 会議等の開催

- (1) 常任理事会：1月24日、4月18日、6月20日、8月15日、10月17日、12月12日の計6回開催。
- (2) 全国支部長会議：9月11日の計1回開催。
- (3) 理事・評議員会：2月15日、9月11日の計2回開催。
- (4) 総会：2月15日の計1回開催。
- (5) 第12回大会の開催：9月12～13日に田園調布学園大学(神奈川県川崎市)にて開催。参加人数238名。

2. 会員の動向

2009年12月末日時点で 個人会員589名、学生会員72名、団体会員56件、賛助会員5件の計722会員。
入退会については、入会が51件(個人43 学生7 団体1)、退会が36件(個人25 学生2 団体8 賛助1)。

3. 委員会等による活動

- (1) 学会誌編集活動：学会誌14-1、14-2号を発刊。
- (2) ACS：第199～209回(1月17日、2月15日、3月21日、4月18日、5月16日、6月13日、7月11日、8月22日、10月10日、11月14日、12月19日)の計11回開催。なお、第205回(7月)より会場を明治学院大学から筑波大学東京キャンパス大塚校舎へ変更。
第200回は総会後に「新ACS方式」の試み(大川チーム)を発表。第202回は岩手支部招聘による事例検討、第203回は第200回の新ACS方式の試み第2弾(佐藤チーム)、第204回は大分支部招聘による事例検討、第205回は第200回のフォローアップ事例、第206・208回は神奈川支部との共催事例、第207回は東関東支部との連携事例。
- (3) 講座：①第4回老年行動科学講座を7月26日、8月30日、9月27日、10月25日、11月29日、12月20日の計6回開催。参加人数 計61名。
②株式会社マルエツによる顧客対象講座の企画立案および後援を行った。1月26日開催、応募909件、参加者100組200名。
- (4) 広報：①「学会からのお知らせ」No.16～26の発行。
②学会員募集案内パンフレット作成(10,000部)。
- (5) IT事業：ホームページの充実強化、メール配信サービスの継続(登録数 187件)
- (6) 調査・研究事業：ACSの充実強化を図るための研究・モニター調査、「こころ・からだ事典」出版の推進。
- (7) 記録事業：2012年の学会15周年記念事業の取り組みに着手。
- (8) 企画：学会15周年記念事業の取り組み開始にあたり記録事業に協力。

4. 支部による活動

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| ①長 野支部：ACS 2回、講演 1回、会議等 1回。 | ⑥鹿児島支部：ACS 2回、会議等 8回。 |
| ②神奈川支部：ACS 2回。 | ⑦石 川支部：ACS 1回、講座等 1回。 |
| ③大 分支部：ACS 5回、講座等 2回、講演 1回。 | ⑧岩 手支部：ACS 2回、講演 2回。 |
| ④青 森支部：ACS 1回、講座等 1回。 | ⑨京 都支部：ACS 1回、講演 1回、設立総会 1回。 |
| ⑤東関東支部：ACS 3回、講演 1回、会議等 2回。 | |

5. 2009年度の新たな取り組み

- (1) 新しいACS方式の取り組み：ACSの様式・検討方法について再考するとともに、アドバイスの効果についてもフォローアップの視点から検討し、より「行動科学」的視点に立った新方式の確立を目指した。
- (2) 老年行動科学講座を全面リニューアルし、行動科学とその視点に重点を置いた「実践編」とした。

2010年度 学会活動スケジュール

	日程	会員の皆様へのご案内	会議等
1月	1月9日	第210回ACS開催(筑波大学東京キャンパス大塚校舎)	
	1月12日		本部会計チェック(本部事務局)
	1月30日		第1回常任理事会(筑波大学東京キャンパス大塚校舎)
2月	2月上旬	メール配信2月号の配信	
	2月上旬	お知らせ27号の送付	
	2月6日		本部会計監査(本部事務局)
	2月中下旬	第13回鹿児島大会開催案内発送(第1号)(予定)	
	2月21日		第1回理事・評議員会(筑波大学東京キャンパス大塚校舎)
	2月21日	定時総会・記念プログラム(筑波大学東京キャンパス大塚校舎)	
3月	3月上旬	メール配信3月号の配信	
	3月上旬	お知らせ28号の送付	名簿作成作業開始
	3月13日	第211回ACS開催(筑波大学東京キャンパス大塚校舎)	
	3月下旬	第13回鹿児島大会開催案内発送(第2号)(予定)	
4月	4月上旬	メール配信4月号の配信	
	4月上旬	お知らせ29号の送付	
	4月10日	第212回ACS(会場後日決定)	第2回常任理事会
5月	5月上旬	メール配信5月号の配信	
	5月上旬	お知らせ30号の送付	
	5月8日	第213回ACS(会場後日決定)	
	5月中旬	第13回鹿児島大会 研究発表・ケースワーク報告 ・参加者募集要項発送(第3号)(予定)	
6月	6月上旬	メール配信6月号の配信	理事改選用の選挙人名簿作成開始
	6月上旬	お知らせ31号の送付	
	6月12日	第214回ACS(会場後日決定)	
	6月12日		第3回常任理事会
	(未定)	市民講座(1)開催 ※詳細未定	
7月	7月上旬	メール配信7月号の配信	
	7月上旬	お知らせ32号の送付	
	7月上旬	第13回鹿児島大会からのお知らせ(第4号)発送(予定)	
	7月10日	第215回ACS(会場後日決定)	
	(未定)	市民講座(2)開催 ※詳細未定	
8月	8月上旬	メール配信8月号の配信	
	8月上旬	お知らせ33号の送付	
	8月中旬	第216回ACS(会場後日決定)	
	8月中旬		第4回常任理事会
9月	9月上旬	メール配信9月号の配信	
	9月上旬	お知らせ34号の送付	
	9月2日		全国支部長会議(鹿児島市)
	9月2日		第2回理事・評議員会(鹿児島市)
	9月3・4日	第13回大会開催(会場 鹿児島市 鹿児島県民交流センター)	
	9月中旬	会員新名簿完成・会員に送付	
	9月中旬	理事選挙の投票用紙と選挙人名簿を会員に送付	
10月	10月上旬	メール配信10月号の配信	
	10月上旬	お知らせ35号の送付	
	10月9日	第217回ACS(会場後日決定)	
	10月9日		第5回常任理事会
	10月中旬	選挙理事の選挙と決定	
11月	11月上旬	メール配信11月号の配信	
	11月上旬	お知らせ36号の送付	
	11月13日	第218回ACS(会場後日決定)	
	11月中旬	選挙理事会議開催(次期会長選出と会長指名理事決定)	
12月	12月上旬	メール配信12月号の配信	
	12月上旬	お知らせ37号の送付	
	12月18日	第219回ACS(会場後日決定)	
	12月18日		第6回常任理事会・新理事会・新常任理事会

本年度は、『老年行動科学講座』の開催については、現在休講を含めて検討中です。

4月以降のACS会場につきましては、筑波大学東京キャンパス大塚校舎の改装に伴い、現在代替会場を検討中です。

市民講座を計画中

本年6月・7月には、市民講座を企画中です。
年をとるとはどういうことか？
よりよい老後を迎えるには？
学会気鋭の講師がわかりやすく説明します。
詳細は決定次第お知らせいたします。

その他、学会誌「高齢者のケアと行動科学」第15巻第1号・第2号を年内に発行予定です。

※日程は変更・追加することがあります。詳細は毎号のメール配信・お知らせ等をご覧ください。

井上教授のコラムアーカイブ (8)

あなたは「さん」づけ派? 「おじいちゃん・おばあちゃん」派? ～呼びかけ異聞～

…中央法規出版「歳をとることが本当にわかる50の話」より

「歳をとる」とはどのようなことでしょうか。「認知症」とはどんな状態なのでしょうか。この学会に関心を示した皆さんは、既にそのようなことは経験的に、あるいは本などからの知識を得てよくご存知かもしれません。

でも、どんな状態になるかはわかっている、その背景となる心理はどうでしょうか。お年寄りを子ども扱いしたり、徘徊や盗癖などの問題行動を「認知症だから」で片付けたりはしていないでしょうか? 分かっているようで実は分かっていないこともあるかもしれません。

このコラムでは、日本老年行動科学会の前会長で、現在は駿河台大学教授である井上勝也氏が、長年の高齢者研究の経験から、「水をほしがる人にパンを差し出すような見当違いの対応」が少しでもなくなるよう、高齢者の心と行動について語ります。

※なお、本連載は井上教授の許可を得て、過去に発表された文章を再掲させていただいています。

介護職によるある事例検討会に参加しました。その日の当番発表は、某有料老人ホームの若いケアワーカーでしたが、その発表を聞いて、私は仰天しました。彼女は真剣な顔でこう言ったのです。「(入居者の)〇〇様は、同じフロアの××様とケンカをなさり、『なに言ってやがる! このバカヤロー!』と怒鳴られました」。私の感覚では、ケンカなどは「なさる」というものではなく、バカヤローと「怒鳴られる」ようなものでもないのですが……。

このように、伝えられている「内容」と、それを伝えるのにふさわしい「言葉遣い」とのズレが大きいと、違和感(場合によってはこっけいな感じ)が生じるものです。

【おじいちゃん・おばあちゃんはなぜダメ?】

ひと昔前に、老人ホームの入居者に対する「呼びかけ」に関して論争がありました。入居者に「おじいちゃん・おばあちゃん」と呼びかけるか、「〇〇さん」と苗字にさんづけで呼びかけるか、というものでした。

この論争はすぐに決着がつき、おじいちゃん・おばあちゃんという呼びかけはダメ、“「苗字にさんづけ」が正しい”ということになりました。現在では全国どの施設においても「〇〇さんまたは“様”」という呼びかけが当たり前

になっています。このときの苗字(または名前)にさんづけで呼ぶことが“正しい理由”は私の記憶では次のように4点ほどありました。

- ①おじいちゃん・おばあちゃんは「個別処遇」の原則に反した「十把ひとからげ」的呼び方であり、「個性や人権」を無視した呼び方だ。人にはそれぞれ氏名があるのだから、その人固有の名前(苗字)にさんづけで呼ぶべきだ。
- ②おじいちゃん・おばあちゃんは“家族内呼称”でもある。だから家族でもない高齢者をそう呼ぶのはおかしいし、失礼でもある。
- ③ある1人の人に用事があるときに、「おじいちゃん!」などと呼びかけると5～6人も返事をする。そのせいで食事を中断したりなどの不都合が起こることもある。呼びかけられた側には迷惑な話だ。
- ④〇〇さん、という丁寧な呼びかけのすぐ後で、その人にひどい言葉や態度を言ったりしたりできるだろうか。丁寧な呼びかけの後には、引き続いて丁寧な対応が期待できる。
——ざっと以上のようなものでした。当時は、たとえば認知症の高齢者が何かすると、「コラッ! じいさん、そんなことやっちゃいけねえよ!」などと叱る場面がザラにあった時代ですから、この“呼称変更”には、画期的な意味や効果があったのです。

【親密さを犠牲にする】

しかしそれはそれとして、この“正しい呼称”をもう少し掘り下げてみたとき、それが本当にベストであるかどうかには議論の余地があることも確かでしょう。特に②の、この〇〇さん式の呼びかけ方は、家族でもない相手に対して、家族内呼称のおじいちゃん、おばあちゃんはおかしいし失礼だ、という点には問題があります。

確かに、〇〇さんと呼びかけられれば、「はい、何でしょう？」ときちんと答えなければならぬような感じがします。しかしそのぶんだけ、両者の間に“心理的距離”ができたような気持ちにもなるでしょう。それに対して、おじいちゃん・おばあちゃんという呼びかけは家族内呼称といわれるように（それだからイヤだという人がいるにしても）“家族的な親密さ”を感じさせるものです。まさに孫に声をかけられたような気にする呼びかけ方です。

そして、もし老人ホームが果たすべき大きな役割の1つが、「家族と別れて入居しているあるいは家族のいない高齢者の寂しさを和らげ、できるだけ“家族的雰囲気”をつくること」にあるとすれば、むしろこのおじいちゃん・おばあちゃんという呼びかけこそ、その雰囲気をつくる第一歩ではないか——とも考えられます。

【そう呼ばれたい人をそう呼ぶ】

「苗字にさんづけ」で呼ぶのがよいかそれとも「おじいちゃん・おばあちゃん」と呼びかけるか、それぞれに“言い分”があります。人権尊重や丁寧さを重視するなら、苗字にさんづけがいいでしょうし、親密さを伝えたいときにはおじいちゃん・おばあちゃんがいいでしょう。

どちらにしても、そして高齢者であってもなくても私たちは文字どおり十人十色であり、「苗字にさんづけ」を望む人もいれば、「おじいちゃん・おばあちゃん」と呼ばれたい人もいる。それどころか、「塩じい」のように「じい」をつけて呼ばれたい人もいれば、「栄ちゃん」とか「金やん」のように愛称ふうに呼ばれたい人もいる。したがって事の本質は、その多様性にこそあるのではないのでしょうか。

結論的にいえば、入居者全員を一律に「苗字にさんづけ」で呼ぶのも、また一律に「おじいちゃん・おばあちゃん」と呼ぶのもどちらも言わば十人一色であり、どちらも無理がありおかしい、ということです。

大切なことは、「その人がそう呼ばれたがっている呼び方で呼ぶ」ということではないでしょうか。さんを望む人にはさんで、おじいちゃん・おばあちゃんを望む人にはそのように——。もちろんこれはなかなかたいへんなことで、呼びまちがいをしないよう気を遣うことでもあります。しかしそうしてこそ一律ではない個別処遇をしたことになり、結果として「親密さ」を増し、そして「人権を尊重」したことになるのではないのでしょうか。



井上 勝也 教授

「井上教授のコラム
アーカイブ」は
隔月掲載の予定
です。